

もくじ

あだち民具図典⑫ 実用新案登録された木製洗濯器… P1
歴史を記憶する花畑の蛇橋伝説… P2 花畑運河の開削竣工絵葉書… P4

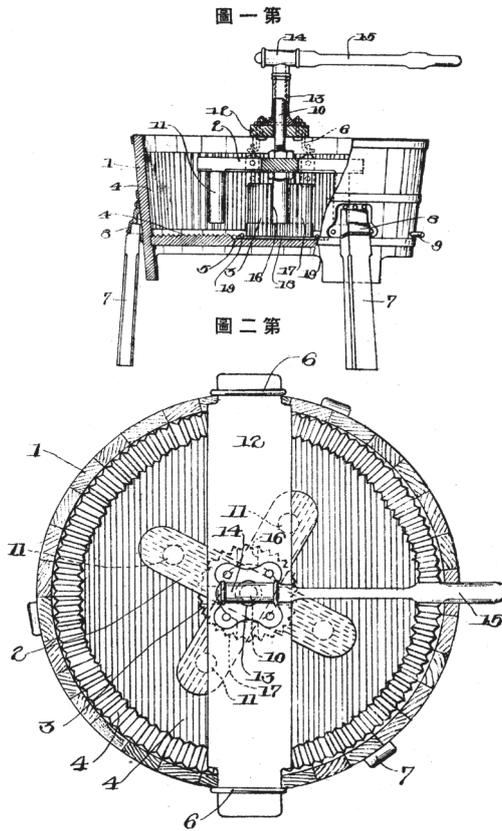
足立史談

第646号

2021年12月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562



安部式洗濯器 大正11年実用新案登録
神明 星野氏寄贈



あだち民具図典⑫

実用新案登録された木製洗濯器



表示板と洗濯器の内部の様子
表示板では「安部洗濯器」になっています。

前号で紹介した木製の栓抜と同じく、木製の洗濯器も「博物館のいっぴん展」(令和二年度)でご紹介しました。「木製の洗濯機？」と聞いただけでは、どのようなものか見当がつかないかと思えます。それが、上記写真です。

この洗濯器も実用新案登録されたものであることがわかりました。

発案者は札幌区北区二条の安部忠氏です。安部式洗濯器の名前の由来は発案者の名前にあります。また、表示板から日本橋金吹町(現在の日本橋室町三丁目、日本橋橋本町三丁目)に安部商会という会社を持っていることがわかります。

特許情報プラットホーム

ム (<https://www.j-platpat.inpit.go.jp/>) の簡易検索で、特許・実用新案、「登録実用新案第六四七八六号」で上記の文献を見ることが出来ます。(4頁中、上の写真は3頁目の図) これによると、登録は大正十一(一九二二)年です。

タライ状の部分は内部に凸凹の溝が彫られています。そして中央に、やはり凸凹に溝をつけた筒を設置します。この間に洗濯物と石鹸水を入れます。上部の取っ手をぐるぐる回すことにより内筒が回転し、これに触れた洗濯物が石鹸水のなかで攪拌(かくはん)、摩擦されることにより布を傷めることなく、均等に汚れを落とすことができます。汚れた水は側面にある穴から抜くようになっています。

簡単に言えば洗濯板での手洗いをハンドル回転で行うもので、一点一

点手でこするより、一度にたくさん楽に洗うことができるというものです。手動であること、さらにタライとして使用できるということで「洗濯機」ではなく「洗濯器」なのでしょう。

内筒は、はずすことができ、普通の洗濯タライ、洗濯板としても使用することができるとあります。

この文献により、博物館にある資料は内筒の部分が失われていることが判明しました。もともと取り外ししやすくできているため、本体のみが残されていたものと考えられます。

大正十一年は、東芝による国産電機洗濯機の第一号が発売された年です。この洗濯機の形状は、円筒形で足がついており、この木製洗濯器とよく似た形です。外国で生産された電気洗濯機を改良し国産化したもので、その前身は手動による円筒形の洗濯器です。

北海道の安部氏は海外の手動洗濯機を参考に、洗濯板を使用する日本の洗濯状況に合わせてアレンジしたと考えられます。外国で木製洗濯器が開発されたのも明治の中頃から大正期です。安部式洗濯器の発案とそれほど年代に差がないところを見ると、その情報の取得と日本に合わせた発想力、製品化の速さは驚くほどで、ものづくりにかける熱意が想像できます。

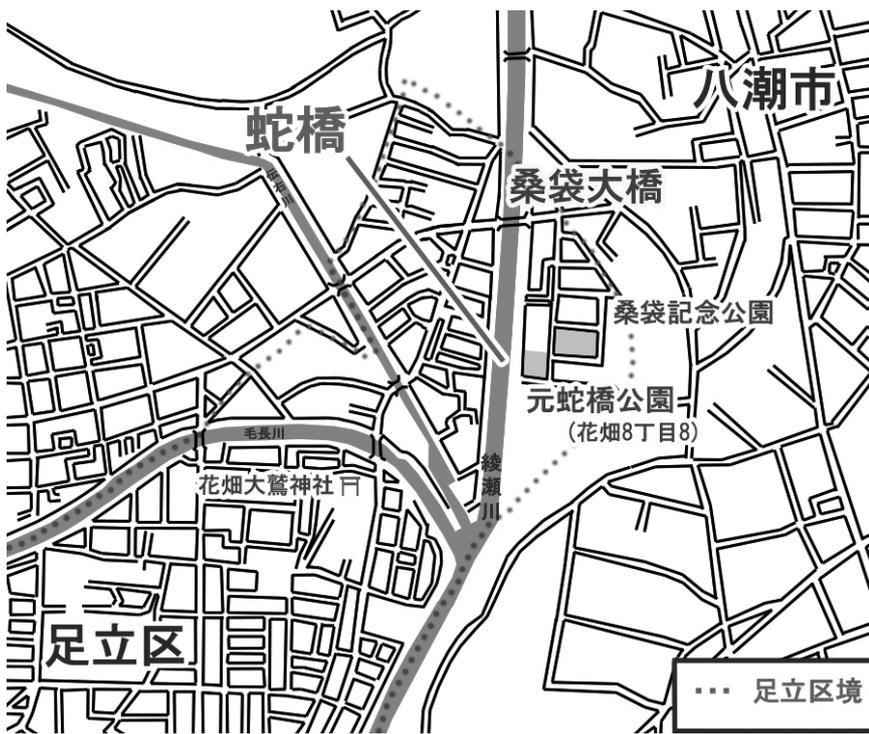
(当館学芸員 萩原ちとせ)

歴史を記憶する
花畑の蛇橋伝説
問所瑛史

足立区花畑と埼玉県八潮市の間を流れる綾瀬川にはかつて蛇橋という橋が架かっていました。【写真1】蛇橋の名前にはこのような伝説が残されています。



【写真1】 蛇橋 1971年撮影



江戸時代、大雨で川が氾濫しそうになった際に大曾根村（現在の八潮市大曾根）の名主の新八が堤防を破壊して水を逃がそうとしましたが、下流村民に察知されて命を落としてしまいました。その後幕府によって新八の家も断絶に処され、新八の母親は「新八や、蛇になれ」と叫び、川に身を投げてしまいました。その後、村人がこの場所を通ろうとする

と、大きな蛇が動くのが目撃され、

した。そのため母子の供養のため石碑が建てられ、この地に架けられた橋が蛇橋と呼ばれるようになりました。（加藤敏夫編『足立百の語り伝え』足立区教育委員会、一九八六年）

蛇橋の伝説は他の民話集や自治体史にも記録され、それぞれ細部が異なっています。児童文学作家の松谷みよ子の再話では、新八は棧俵を被って土手を破壊しようとして役人に片目をえぐられて殺害された点、現れ

たのが片目の蛇の点、徳川吉宗が供養のために橋をかけたという点が相違しています（瀬川拓男・松谷みよ子編『日本の民話10 残酷の悲劇』角川書店、一九七七年）。

『八潮のむかしばなし』（八潮市史編さん委員会編、一九九二年）にも蛇橋の伝説が載っています。新八が片目をえぐられて殺害された点は松谷の再話と共通しています。この話で新八は獅子頭を被り土手を破壊し、

新八の殺害後に片目の蛇と白い蛇が暴れ回るようになりました。役人の浅田近右衛門が徳川吉宗に進言し、蛇橋・蛇塚が作られ供養されたと記されています。

花畑大鷲神社でおこなわれる獅子舞の由来にも伝説が結びついていますが、由来の一つとして花又村（現在の花畑）の若者が土手を切りに行つたという点、若者の供養のために獅子舞がおこなわれるようになったという点に特徴があります（大村達郎「東京都足立区（花畑・鹿浜）の三匹獅子舞 伝承事実把握の試み」『足立区立郷土博物館紀要』第一七号、一九九五年）。

『八潮市史 民俗編』（八潮市役所、一九八五年）では蛇橋・蛇塚の伝説が二件記録されており、概ね他の伝説と一致していますが、堤を破ろうとしたのが花又村の名主であるという話や、その時に被っていた獅子頭が中馬場地区の山王社の獅子という話も記録されています。

桑袋記念公園にある土地区画整理組合竣功記念碑【写真2】に刻まれた伝説では徳川吉宗が蛇橋・蛇塚を作り、殺された名主の被っていた獅子頭が花畑の獅子舞になったとされており『足立百の語り伝え』と異なってい

ます。

このように同じ蛇橋の伝説でも書籍や話者によって内容や登場人物が異なっていますが、これはどの伝説が正しいというのではなく、伝承する地域や家、個人の歴史を反映しているものであり、それぞれに価値があります。

■蛇橋伝説の背景 現在ほど治水技術の発達していなかった近世において、大雨の際の水利は死活問題でした。蛇橋の伝説は水害の多い地理的背景を反映している伝説と言えます。

獅子頭を被って堤を壊す話は、隣接する葛飾区や三郷市にも伝わっています。柳田国男は戸ヶ崎村（現在の埼玉県三郷市）の住民が獅子頭をかぶって堤を切ったという話が記録されていることを述べ、獅子頭が災難を村の境界外へ駆逐する威徳があったことを述べています（柳田国男「獅子舞考」『柳田国男全集 二五卷』筑摩書房、二〇〇〇年）。獅子舞は治水祈願としても行われるため、川や水へ働きかける意味が込められていたと考えられます。実際、蛇橋

近辺の綾瀬川は近世中期に流路開発がおこなわれており（足立区立郷土博物館編『葵の御威光 江戸近郊徳川領の歴史と伝説』二〇〇六年）、そうした事実を反映した伝説とも考えられます。

次に徳川吉宗の存在です。近世後

期に村落では、由緒書や地誌が作られるようになりました。そうした動きの中で將軍や大名などの権威ある存在を家や村の事物と結びつけ、いくつもの伝説が誕生しました。足立区は江戸に近く將軍の鷹狩り場であったこともあり、將軍の登場する伝説が多く伝わっています。蛇橋の舞台も一七世紀に流路変更の工事がおこなわれています。竣功記念碑は蛇橋伝説について、「綾瀬川流路変更に結びつけた寓話だろう」と結んでいます。登場する徳川吉宗からは、地域の人々が蛇橋を將軍に関連付けようとした心性と、優れた人物とされる吉宗の権威へのまなざしがうかがえます。

■蛇橋の現在 蛇橋は老朽化が進み、一九九一年に解体され、約三〇〇メートル上流に桑袋大橋が建設されました。【写真3】

現在、蛇橋があった傍には桑袋記念公園と蛇橋公園が存在し、敷地内にはそれぞれ桑袋土地区画整理組合の竣功記念碑【写真2】と解散記念碑が建立されています。竣功記念碑は一九九五年に建立されたもので、裏側には宅地の利用増進・地域環境の整備・住民福祉の増進のために事業を起こし、桑袋大橋の建設などの事業をおこなうことや、蛇橋の伝説について記しています。解散記念碑には桑袋土地区画整理組合解散時の



【写真2】 桑袋土地区画整理組合竣功記念碑（2021年）筆者撮影

組合員の名前と区画整理した土地の地図が刻まれています。

桑袋大橋は木製の蛇橋とは違い鉄筋コンクリート製の近代的な橋で、橋のかかる桑袋大橋通りは交通量の多い道路となっています。かつての蛇橋の面影は残っていませんが、桑袋大橋の親柱には蛇の意匠が施され、欄干には伝説のストーリーを描いたレリーフが付されています。

モニュメントや記念碑は地域や国家などの共同体の歴史や伝説を視覚的に表し、過去を記憶し、後世へと伝えていく存在です。蛇橋はなくなっ
てしまいましたが、碑やモニュメントの存在は後世へとその歴史と伝説を伝えていくでしょう。

(郷土博物館専門員)



【写真3】 桑袋大橋 2021年9月筆者撮影

花畑運河の 開削竣工記念 絵葉書三枚

花畑運河は、現在、花畑川とよばれる足立区が管理する準用河川です。運河という名前のおり、中川と綾瀬川を東西に結ぶ約一、四キロ、幅三十三メートルを開削し、船の往来を目的にした人工河川です。竣工は、昭和六(一九三一)年の十二月、開削から今年、ちょうど九〇周年を迎えました。



花畑運河泥炭張護岸



花畑運河全景(中川水門附近)



花畑運河全景(綾瀬水門附近)

この絵葉書は竣工間もない花畑運河を撮影したもので、地域の関係者などに記念品として配られたものです。(花畑 千ヶ崎家寄贈)

絵葉書の包み紙の表題には、「昭和七年四月 花畑運河竣工記念 東京府」とあります。絵葉書を見ると、運河水門上の月見橋(綾瀬川側)、花見橋(中川側)のほか、すでに桜木橋、雪見橋の姿も見えます。

『足立風土記稿 花畑』(足立区教育委員会発行)では雪見橋は昭和十三年(一九三八)、桜木橋は昭和二十四(一九四九)の架橋と記述していますが写真からは運河竣工時に

は完成していたと見え、架橋年についてはもう一度検討する必要があります。

運河の完成によって、中川から隅田川に至る船舶の利便が大いに高まりましたが、次第にその役目もなくなり、昭和四〇(一九六五)年に一級河川花畑川と名を変え、平成十三年に準用河川になりました。現在は、葛西用水親水路やしょうぶ沼公園・中居堀親水路の水源にもなっており、都市のなかの川として新しい姿に変わろうとしています。

(郷土博物館学芸員 萩原ちとせ)